



四小だより

令和6年 9月 30日
府中市立府中第四小学校
校長 安原 一朗
No.7



発達に凸凹のある子への適切な対応



校長 安原 一朗

多くの大人にある「年齢相応にできるのは当たり前。できないときだけ叱る。」という考え方は、発達に凸凹のある子供たちには向きません。出来事の背景を読み取る力が弱い子は、なぜ叱られているのかを理解できないからです。やみくもに叱るのではなく、学校では「こうすればうまくいく」という方法を丁寧に教えてあげるようにしています。また、おうちの方々も子供たちの「できていること」「努力していること」を確認して認めてあげるとよいでしょう。

4・5年前、すぐに教室を飛び出す子がいました。支援員が追いかけると、こちらを確認しつつ、さらに逃げ回ります。校長や副校長が追いかけても同じです。子供が「主導権」を握り、私たちはその対応に追われているため、支援が効果的でないことがありました。追いかけるために、飛び出しているのに、追いかければ追いかけるほど、その現象がエスカレートしたものです。子供が主導権を握ったままでの状況では、支援の効果は期待できないので、「戻ろう。」ではなく「教室へ戻って、〇〇をやろう。」などのことばで、先手の支援を行い、主導権がこちらにある状態にすることが大切です。また、ジャングルジムの上に逃げている子供に、私は「〇〇君は、何年生まで脱走するの？」と時々聞いていました。将来の姿や時間を意識させると、自己を冷静に見つめられることができると何かで読んだからです。これは効果がありました。その子たちは、今は教室の中で落ち着いて学習に取り組んでいる姿を見ます。

対応の仕方は、その困り感が、先天的なものか、後天的なものかによって違うようです。先天的な「脳機能障害」だと、子供の不適切な行動に対して「無視する」「取り上げない」という対応がよいとされることがあります。生じた行動に強化を与えない対応をすることで、その行動を少なくすることができるそうです。しかし、後天的な「愛着障害」のある子供に対しては「無視する」という対応は効果がないばかりか不適切行動を増やしたり、激化させたりするそうです。不適切な行動を少なくするためには、こちらが主導権を握り、適切な行動をするように誘い、できたら褒めるような支援が必要です。

どちらにしても、学校は、不適切な行動が出る前に、「おっ、今日は座っているね。」「おっ、目の色が違うね。」「鉛筆が削ってあるね。」などと先取りして、褒め、『先手を取って』指示して、少しでもできたら褒め、子供の自己実現を図っていきます。

私の経験からも、低学年で心配されていたお子さんが、女子は4年生、男子は5年生くらいで変化します。ですから、『見守ること』が大切です。それまで温かく見守り続けましょう。